

新型コロナウイルスの感染防止で思うこと

NIPTA 理事

日本アイアール知的財産活用研究所 矢間 伸次

新型コロナウイルスの感染防止で、政府の緊急事態宣言が4月7日に出た。不要不急の外出を控え、自宅待機をしている。不安の中での生活は落ち着かない。NIPTA から依頼を受けた原稿（巻頭言）は自宅で書く予定でいる。しかし遅々として進まない。何故なら新型コロナウイルスの報道が気になり集中できないからだ。このままでは原稿の締め切り期日までに間に合いそうもない。ネタ探しにNIPTA で掲載されてきた過去の原稿（自分の）を読み返している

それにしてもコロナウイルスの感染対策は、後手にまわっており、収束には時間がかかりそうである。後手となる理由は、いろいろと有る。先ずは所轄する責任部署が、これから先、何が起こるのかという想像力と、その対策を具体化していく創造力が足りないことだ。

我々日本人は、場当たりの解決と問題の先送りをしたがる習性がある。イザ問題が起きた時は、周りの風を気にしながら「ウヤムヤ」にして先送りしたがる。あるいは慌てて場当たりに処理をする。後になって解決しようにも事情が以前と大きく変わっており、解決が難しくなる。反省がないのも、懲りないのも、忘れやすいのも日本人気質の利点と言えばそれまでだが時と場合によっては、物事を論理的に考えることも必要かと思う。

お上（政府）は指針を出す責任は取らない。詰まるところ現場で、あるいは自己責

任で対処せよ、というスタンスは変わらない。福島原発事故で原発施設に関する安全審査指針を読んだ時の驚きは忘れない。責任所在は曖昧で読み手側の判断に任せる、という誰もが責任を取らない見事な？文章であった。これは日本特有の複雑さと曖昧さがそうさせているに違いない。こうなれば“和を以って貴しと為す”という得体の知れない抗体を持つ日本人が新型コロナウイルスから“誠に住みにくい人種だ”と嫌われて逃げ出すか、あるいは良き宿主になり共存するのか不明だが、それを期待するしかない。

こんなことをアレコレと考えている中で、フツと思いついた。NIPTA の過去原稿（自分の）から“これだけは言っておきたい”ことを拾い上げて原稿に仕立てれば締め切り間に合いそう。言いたいことは、知財の世界では「阿吽の呼吸」という以心伝心を期待した曖昧な言葉や文章では世界で通用しないという事実である。

特許翻訳は、なぜ悩ましいのか

翻訳を悩ましくさせている原因は、翻訳が難しい日本語文章を書く側にも責任がある。翻訳者に総ての責任を押し付けられては困る。翻訳しやすい日本語表現に整えて翻訳依頼するのが依頼者側に求められる最低の「マナー」でもある。

特許明細書とは

国際出願（PCT）の約束の下では、国内出願の優先権は認めるが、それを英語で提出するときは、国内で出願した内容と同じ事項を記せ、となっている。当然であろう。特許明細書は「発明技術の説明書」である。米国では、発明に関する仕様書と位置づけられている。

「グローバル知財」のカギを握る特許翻訳者

日本は「グローバル知財」で活躍ができる「知財人材」が圧倒的に不足している。それは我々日本人が世界へ発信するための言語に対して無関心であること、日本語が技術の説明に適さないことを強く認識していないことと関係がある。

虚しい「日⇄日翻訳」から解放すべき

英語への翻訳が難しいのは、日本語を日本語へ翻訳する「日→日翻訳」の作業にある。翻訳者のエネルギーの多くが、この「日→日翻訳」に宛てられている。日本語を母語としている日本人翻訳者が、その日本語の「読解」に苦勞しているのが現状である。

日本に必要な「平明日本語」運動

世界の人々に「物・事・考え」を伝えるためには、好むと好まざるに関わらず、それらを明快に記述する言語を用意し、誤解なく伝えることが重要である。つまり日本人と文化を異にする世界の人々へ語りかける、橋渡しをするためのオープンな「やさしい日本語」である。

発明技術の説明は、「文明言語」で行う

例えば、科学技術の世界において、電気の流れは民族と文化に関係なく、どこにおいても同じ原理で流れる。どれくらいの容量の電気が、どこで生まれ、何を通して、どこからどこへ、どのようなタイミングで、何のために流されているのかは、英語でも日本語でも正確に同じに記述できる筈だ。

I P戦争とは詰まるところ言語の戦いである

このスローガンを実現させるためには、世界の主要言語である英語と互換性（変換できる）のある日本語文章を書くことが基本である。それは世界の共通（普遍）事項の記述を英語へ容易に変換できる、普遍的な日本語表現である。それは日本文化に根ざした「美しい日本語」でなく「文明日本語」のことである。

機械翻訳ソフトの支援が受け入れられる日本語を意識する

世界の共通語である英語と互換性が取れる日本語を強く意識すれば、翻訳ソフト（AI）の支援が受けられる。英語は極めて構造的な言語であるから難しくない。この英語の利点を我々日本人は大いに利用すべきである。英語と互換性のある日本語を書くことに慣れてくれば知財従事者の英語力と論理力は格段とアップしていく。「グローバル知財」で活躍ができる「知財人材」が育つこと保証つきである。

翻訳者は翻訳ソフトを使いこなし、翻訳知識と経験を吹き込む

普遍的な日本語表現で書かれていれば、翻訳者は翻訳ソフトの支援を受けながら万全の翻訳作業を進めることができる。翻訳の仕事は、デジタル技術とアナログ知識の合体（融合）作品（デジアナ商品）である。文法に則った文書は人にわかり易い。文法に則った文章は翻訳ソフトに優しい。翻訳ソフトで70～80%の翻訳品質が得られれば翻訳作業の生産性は飛躍的に上がる。あとは翻訳者の知識と経験を吹き込んで100%以上の翻訳品質を目指せば良い。この「英文特許出願明細書」を世界各国へ出願する「基準特許明細書」にする。この「基準特許明細書」を各出願国の現地代理人へ渡せば各国間の翻訳バラツキは無くなり、余計なコストが削減される。